

K-55/

米沢市埋蔵文化財発掘報告書 第56集

金ヶ崎 A 遺跡 発掘調査報告書

平成9年12月
1997

米沢市教育委員会

金ヶ崎 A 遺跡
発掘調査報告書

平成9年12月
1997

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、平成7年度に発掘調査を実施した、金ヶ崎A遺跡の結果をまとめたものです。

近年、本市におきましても大規模な開発事業が増加しており、本市教育委員会は、埋蔵文化財保護の立場から、開発事業者等との調整を円滑に行っております。

今回の調査は、資材置場の開発に伴うもので、開発業者のご理解を得て緊急発掘調査を実施したものであります。今回の調査では、奈良時代から中世の遺構・遺物などが検出されたことで意義深いものがあります。

最後になりましたが、調査にあたって多くのご指導、ご協力を賜りました文化庁及び山形県教育庁文化財課をはじめ、開発事業者並びに地権者の(株)網代土建、植杉造園(有)、地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成9年12月26日

米沢市教育委員会
教育長 相 田 實

例言・凡例

- 1 本報告書は、平成7年度に実施した、金ヶ崎A遺跡の緊急発掘調査報告書（米沢市埋蔵文化財調査報告書第56集）である。
- 2 調査は米沢市教育委員会が実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 金ヶ崎A

所在地 米沢市大字下新田字三合免

調査主体 米沢市教育委員会

調査期間 平成7年7月17日～同年9月8日（現地調査 34日間）

調査総括 舟山 豊弘（文化課長）

調査担当手 塚 孝

調査主任 月山 隆弘

調査参加者 石井 よそ子 井上 吉栄 宇津木 信男 菊地 芳子

小関 ち江 小関 春雄 佐藤 裕子 田村 和男

中島 国雄

事務局長 我妻 淳一

事務局 平岡 洋子

調査指導 文化庁 山形県教育庁文化財課

- 4 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は、BY-建物跡、TY-柱穴、PY-ピット、DY-土塙、OY-墓塚、DN-井戸跡、KY-溝跡、AZ-土器を示す。挿図内の●は出土地点を表す。挿図の縮尺は、各挿図にスケールで示した。図版の縮尺は適宜示した。挿図と図版の番号は同一である。
- 5 柱穴の平面図に使用したスクリントーンは、柱痕跡が明確なものである。
- 6 出土遺物・調査記録類については、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。
- 7 本書の作成・執筆・編集は月山隆弘が担当し、全体については手塚 孝が総括した。
- 8 調査にあたって、傑網代土建、植杉造園舗、関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

本文目次

序 文

例言・凡例

第Ⅰ節 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境	1
2 調査の経過	1

第Ⅱ節 検出遺構

1 掘立建物跡（Ⅰ期）.....	3
2 掘立建物跡（Ⅱ期）	10
3 土 塙（Ⅰ期）	15
4 溝 跡（Ⅰ期）	17
5 土塙・井戸跡（Ⅱ期）	17
6 溝 跡（Ⅱ期）	20
7 中世期（Ⅲ期）	20

第Ⅲ節 出土遺物	22
----------------	----

第Ⅳ節 総 括	30
---------------	----

参考文献	30
------------	----

報告書抄録

表-1 掘立建物跡計測値	20
--------------------	----

挿 図 目 次

第1図 金ヶ崎A遺跡及び周辺の遺跡	2
-------------------------	---

第2図 建物全体図（Ⅰ期）.....	4
--------------------	---

第3図 遺構全体図	5・6
-----------------	-----

第4図 BY1掘立建物跡	7
--------------------	---

第5図 BY2掘立建物跡	8
--------------------	---

第6図 BY3掘立建物跡	9
--------------------	---

第7図 BY6・8掘立建物跡.....	11
---------------------	----

第8図 BY4・10掘立建物跡	12
-----------------------	----

第9図 BY5掘立建物跡.....	13
-------------------	----

第10図 BY7・9掘立建物跡.....	14
----------------------	----

第11图	DY35・39~44土壙	16
第12图	DY32・53土壙，OY47・97墓壙	18
第13图	DY48・54・55・61土壙，DN54井戸跡	19
第14图	KY33・34・36・37溝跡	21
第15图	出土遺物実測図(1)	23
第16图	出土遺物実測図(2)	25
第17图	出土遺物実測図(3)	26
第18图	出土遺物実測図(4)	27
第19图	出土遺物実測図(5)	28
第20图	出土遺物古銭拓影図	29

図版目次

図版一	BY1掘立建物跡，TY1~3・10柱穴
図版二	BY5・6掘立建物跡
図版三	DY48土壙 AZ1出土状況
図版四	DY61土壙 AZ6出土状況，AZ2・5・6出土状況，DY32・53土壙
図版五	DN54井戸跡・DY55土壙，DY53土壙，AZ3出土状況
図版六	KY33・34溝跡，KY36・37・49・56~60溝跡，TY11柱穴
図版七	OY97墓壙，調査風景
図版八	出土遺物(1)
図版九	出土遺物(2)
図版十	出土遺物(3)



遺跡全景 (西から)



BY5 掘立建物跡 (南から)

第I節 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境

本遺跡は、市街地から北東約3kmの、米沢市大字下新田字三合免の標高約243mに所在している。吾妻山を源とする最上川（松川）と羽黒川の支流である馬橋川が合流して形成された、舌状台地の先端部にかけて分布している。

遺跡の存在する周辺には、県内でも最大の終末期古墳等が群集する戸塚山古墳群をはじめ、奈良時代の郷衛跡の可能性が推測される上浅川遺跡や戸塚山古墳群に密接な係りがあり、祭祀を主体とした集落である上新田A遺跡など貴重な遺跡群が存在する。古墳時代から奈良時代・平安時代・中世期にかけての遺跡群が戸塚山古墳群を中心に約70箇所分布している。金ヶ崎A遺跡もこれら一連の遺跡である。

当遺跡は現在までに過去3回の発掘調査を実施している。しかし、主要な遺構・遺物は確認されず、明確な集落跡の構成には至らず、集落跡は形成されなかったものと判断していた。

今回の調査は、資材置場の開発に伴うもので、開発予定地内に試掘トレンチ（幅約2m×長さ約30m）を東西方向に2本、南北方向に1本を設定して試掘調査を実施した。その結果、開発範囲の北西側を中心に、奈良時代から平安時代にかけての建物跡や土壊・溝跡等が多数分布することが判明したことから、開発関係者と協議の上、開発予定地約1,500㎡のうち約1,050㎡の範囲を対象に緊急発掘調査を実施するに至った。

2 調査の経過

調査は、開発予定地の調査対象面積約1,500㎡のうちの遺構が分布する北西側を中心に、東西約35m、南北約30mの約1,050㎡を調査の対象とし調査範囲を設定した。

平成7年7月17日から調査を開始した。重機で表土剥離を行う際に調査区中央部付近から須恵器坏片が多量表探された。表土剥離と並行して面整理を7月21日まで行った。その際に、南側中央部付近で楕円形の土壊の内部から古銭が13枚確認された。

7月26日から遺構確認のための面精査を実施したところ、柱跡や土壊・溝跡や、須恵質土器、須恵器等が多数出土した。8月7日には遺構の確認をほぼ終了し、プラン確認後遺構の掘り下げを順次進めた。8月8日から掘立柱建物と推測される柱穴や、近世の遺構を掘り下げた。8月21日からは遺構の平面図作成、8月28日から溝跡や柱穴の断面図作成、8月31日に現地説明会を開催し、9月8日で現地調査を終了した。



- | | | | |
|-----------|------------|--------------|--------------|
| 1 金ヶ崎 A遺跡 | 2 保呂羽堂遺跡 | 3 三合目館跡 | 4 戸塚山幼稚園 a遺跡 |
| 5 中川原遺跡 | 6 中川原館遺跡 | 7 戸塚山幼稚園 b遺跡 | 8 上新田 b遺跡 |
| 9 金ヶ崎 b遺跡 | 10 飯塚北古墳群 | 11 飯塚南古墳群 | 12 飯塚館跡 |
| 13 飯塚南寺跡 | 14 上新田 c遺跡 | | |

第1図 金ヶ崎A遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅱ節 検出遺構

今回の調査で検出された遺構には、掘立建物跡（10棟）を中心に、土塋（14基）、溝跡（11基）、井戸跡（1基）、墓塚（2基）、他に不明柱穴（99基）、近世の風倒木跡（3基）などがあり、計209基が確認されている。これらの遺構は、掘立建物跡などの重複関係からⅢ期に分けられ、Ⅰ期は奈良時代末期から平安時代初期、Ⅱ期は平安時代、Ⅲ期は中世期と判断された。以下、主要遺構である建物跡、土塋、溝跡を中心に概述する。

1 掘立柱建物跡（Ⅰ期）

Ⅰ期の建物跡は、溝状遺構（KY 33・34）で区画された範囲を中心に5棟の建物跡群と物置槽的な建物跡1基で構成されている。

・BY 1（掘立建物跡）「第4図 図版一」

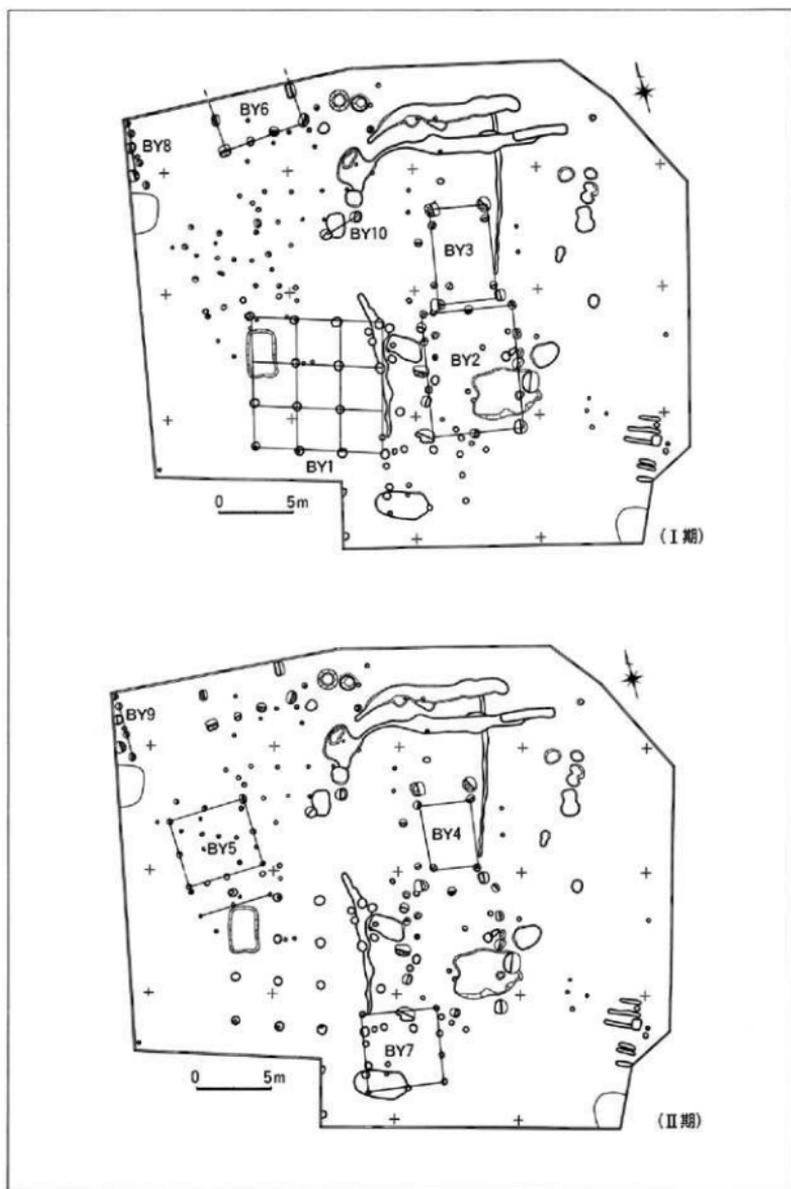
調査区の南西側に確認された。桁行、南北3間（8尺）×梁行、東西3間（8尺）の規模を有する。主軸方向（N-2°-W）を示す。総柱の建物跡で1間が8尺（240cm）を呈し、約15坪の床面積をもつ大型の倉庫跡と判断される。東辺及び西辺の一部では柱が確認されない。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し、長短径25～30cmを測る。柱痕跡はTY 1・2・10・11・12・13から検出され径10～15cm、深さ15～20cmを測る。大分浅いことから柱穴上部は削平されている。断面形状はほぼ垂直であり、柱穴内の覆土は1～2層に区分される。TY 8柱穴内部からは須恵器蓋、TY 10から須恵器坏が出土している。BY 5、KY 38、OY 97と重複する。時期は、建物跡の配置及び重複関係から、当遺跡では初期の8世紀末頃、奈良時代末の建物跡と想定される。

・BY 2（掘立建物跡）「第5図 図版一」

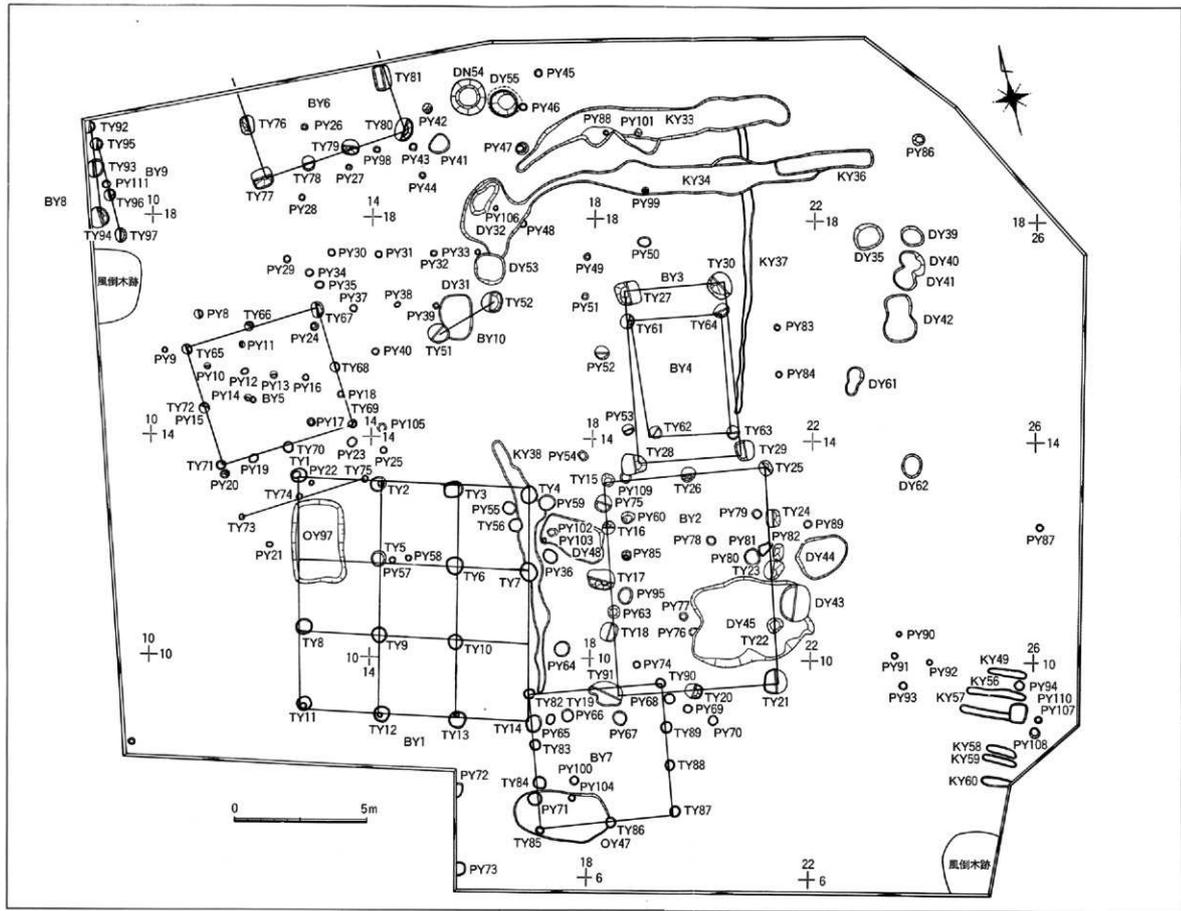
調査区の中央部南側に確認された。桁行、南北4間（9尺）×梁行、東西2間（7尺）の規模を有する。主軸方向（N-5°-W）を示す。掘り方の平面形は隅丸方形を呈し、長短径45～60cmを測る。柱痕跡はTY 16・17・19～21・23～26から検出され径15～20cm、深さ25～40cmを測る。断面形状はほぼ垂直であり、覆土は1～2層に区分される。TY 18柱穴内部からは、須恵器坏が出土している。BY 7と重複する。母屋的建物跡と推測される。時期はBY 1と同様、8世紀奈良時代末の建物跡と想定される。

・BY 3（掘立建物跡）「第6図」

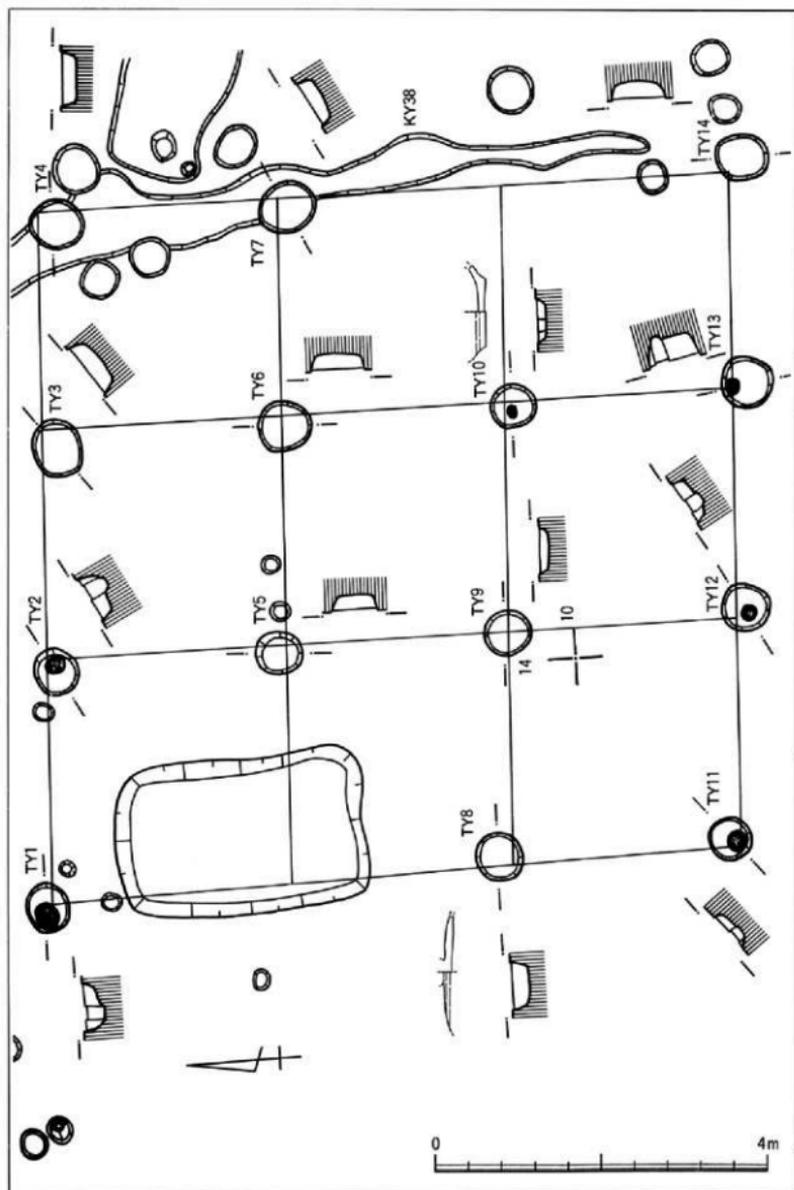
調査区のはほぼ中央部に確認された。桁行、南北1間（9尺）×梁行、東西1間（16尺）の規模を有する。主軸方向（N-6°-W）を示す。掘り方の平面形は長方形を呈し、長短径55～60cmを測る。柱痕跡はTY 27・28・30から検出され径15～20cm、深さ35～40cmを測る。断面形状は垂直であり、覆土は1～2層に区分される。柱穴からの遺物の出土は認められない。BY 2と同様に母屋的な建物跡と推測される。BY 4・KY 37と重複する。時期はBY 1・2と同時期8世紀末頃、奈良時代末の建物跡と想定される。



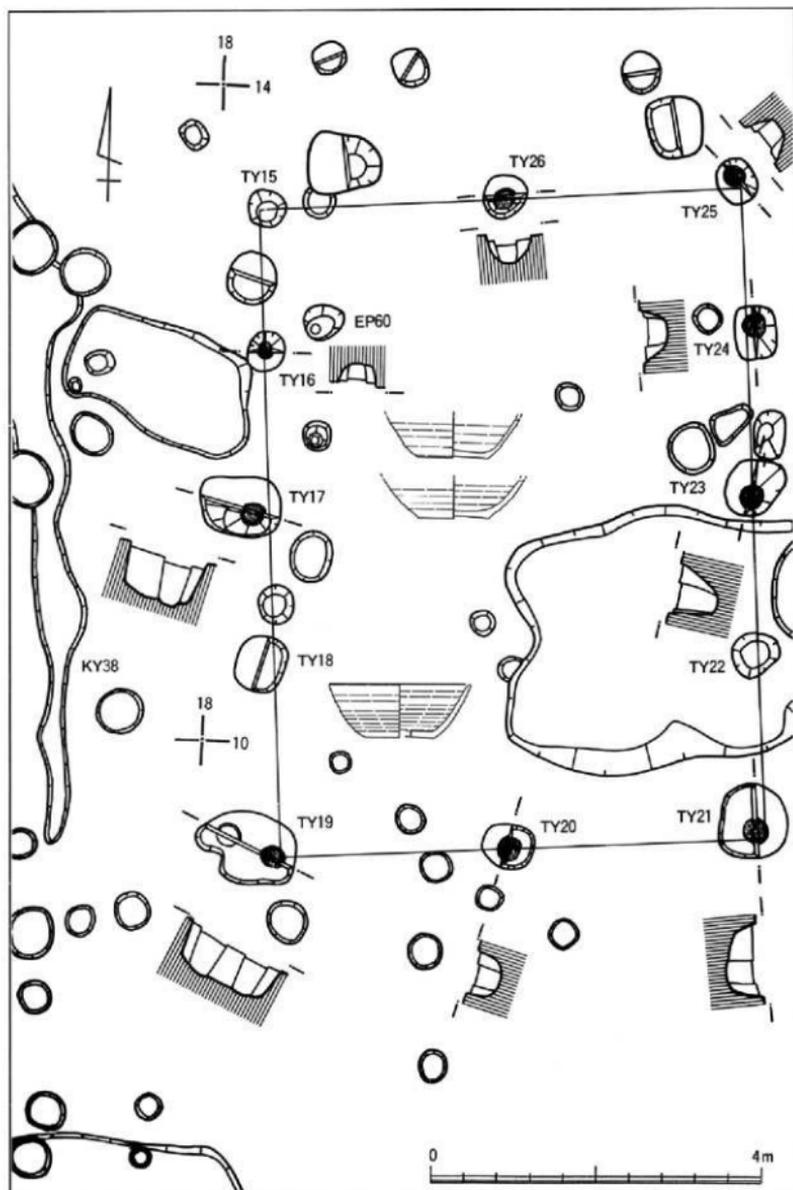
第2図 建物跡全体図 (I・II期)



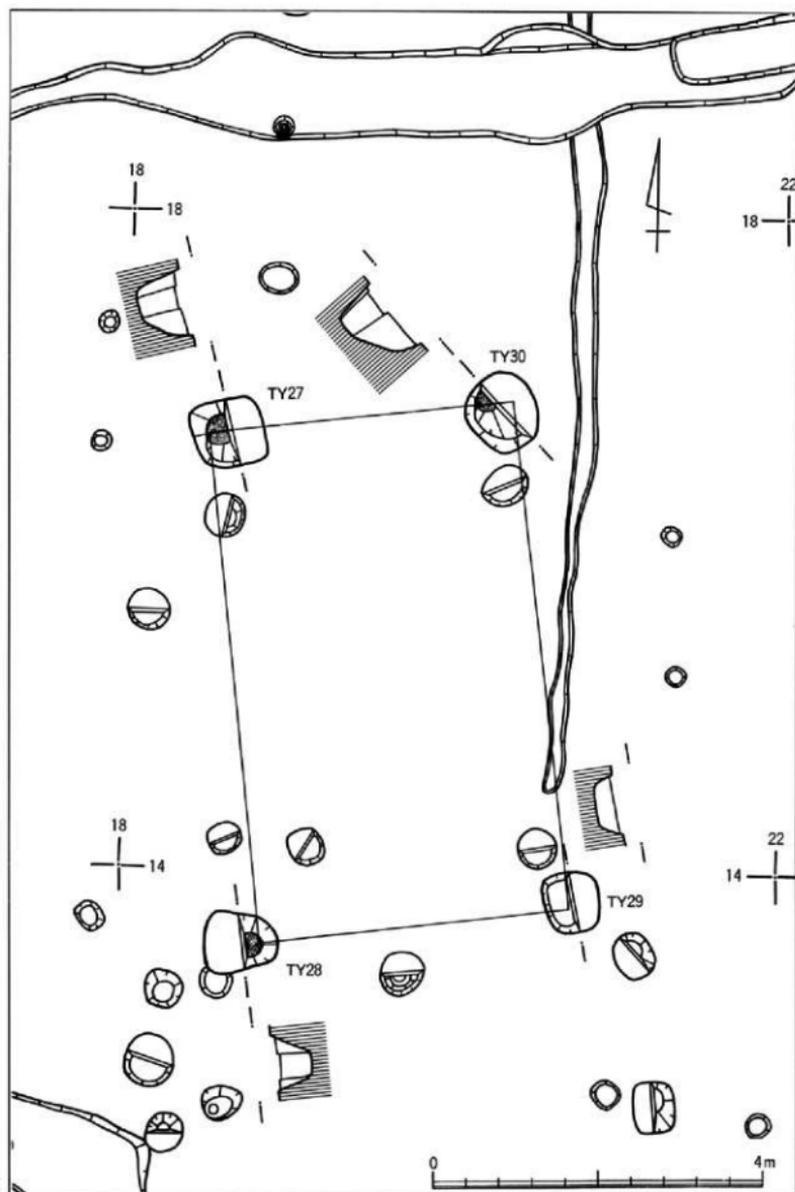
第3图 遺構全体图



第4图 BY1 掘立建物跡



第5圖 BY2 掘立建物跡



第6图 BY3 掘立建物跡

・BY6 (掘立建物跡)「第7図 図版二」

調査区の北西側に確認されたが、北側は調査区範囲外のため未確認である。確認長の桁行、東西3間(3尺)×梁行、南北1間(16尺)の規模を有する。主軸方向(N-12°-W)を示す。掘り方の平面形は長方形を呈し、長短径35~40cmを測る。柱痕跡はTY76~80から検出され径約10cm、深さ25~30cmを測る。断面形状はほぼ垂直であり、覆土は1~2層に区分される。柱穴内部からの遺物の出土と重複関係は認められない。時期はBY1・2・3同様、8世紀末頃、奈良時代末の建物跡と想定される。

・BY8 (掘立建物跡)「第7図」

調査区の北西側に確認されたが、北側及び西側は調査区範囲外のため未確認である。確認長の桁行は不明(6尺)×梁行は不明である。主軸方向(N-6°-W)を示す。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し、長短径35~40cmを測る。柱痕跡はTY92~94の全てから検出され径約10cm、深さ25~30cmを測る。断面形状はほぼ垂直であり、覆土は2層に区分される。柱穴内部からの遺物の出土は認められない。BY9と重複する。時期はBY1・2・3・6同様、8世紀末頃、奈良時代末の建物跡と想定される。

・BY10 (掘立建物跡)「第8図」

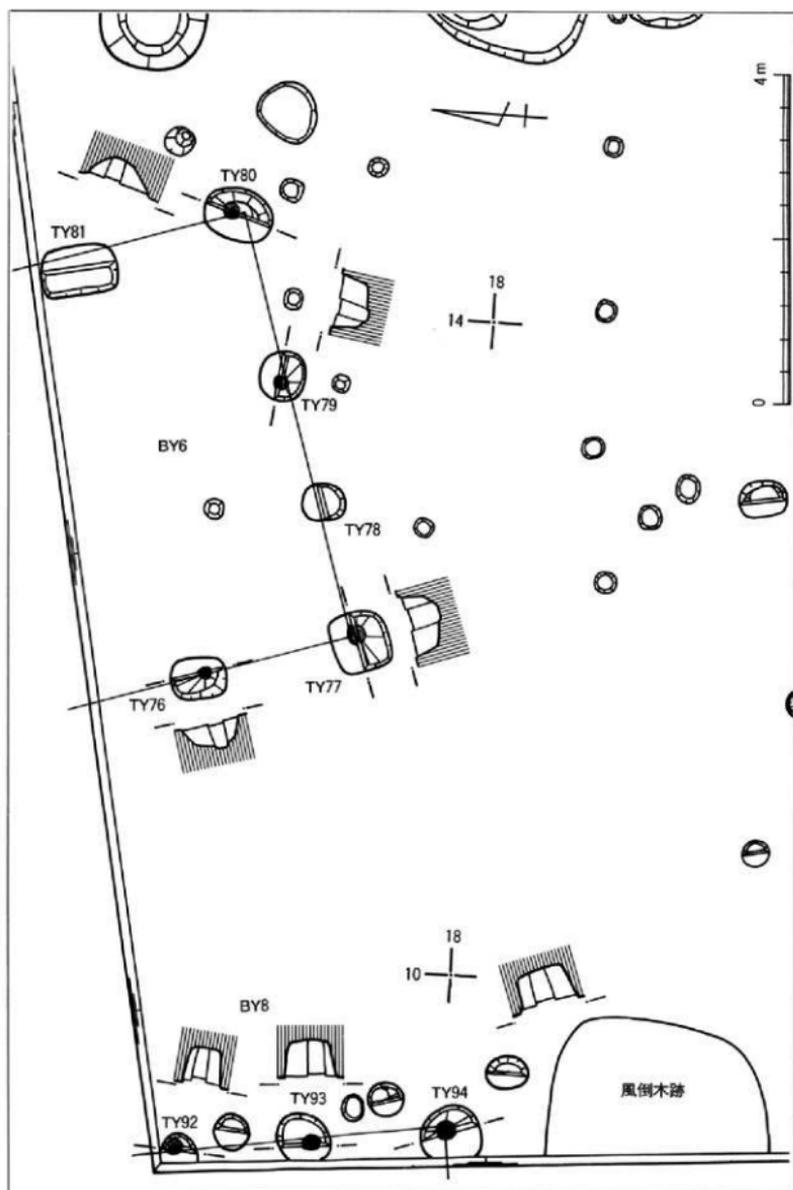
調査区の西側中央部のBY1北側とBY6南側の建物跡の空白地に確認された。TY51・52で構成されており、東西1間で確認されたもので、間尺は8尺の規模を有する。掘り方の平面形は円形と楕円形を呈し、長短径70~80cmを測る。柱痕跡は検出されなかった。深さ35~55cmを測る。断面形状はほぼ垂直であり、覆土は4~6層に区分される。柱穴内部からの遺物の出土は認められない。建物跡群の空白地中心部から確認されたことと、他に構成できる柱穴がないことから、物見台的な役割を果たす建物跡と推測される。柱間にDY31(土城)が重複する。時期はBY1・2・3・6同様、8世紀末頃、奈良時代末の建物跡と想定される。

2 掘立建物跡(Ⅱ期)

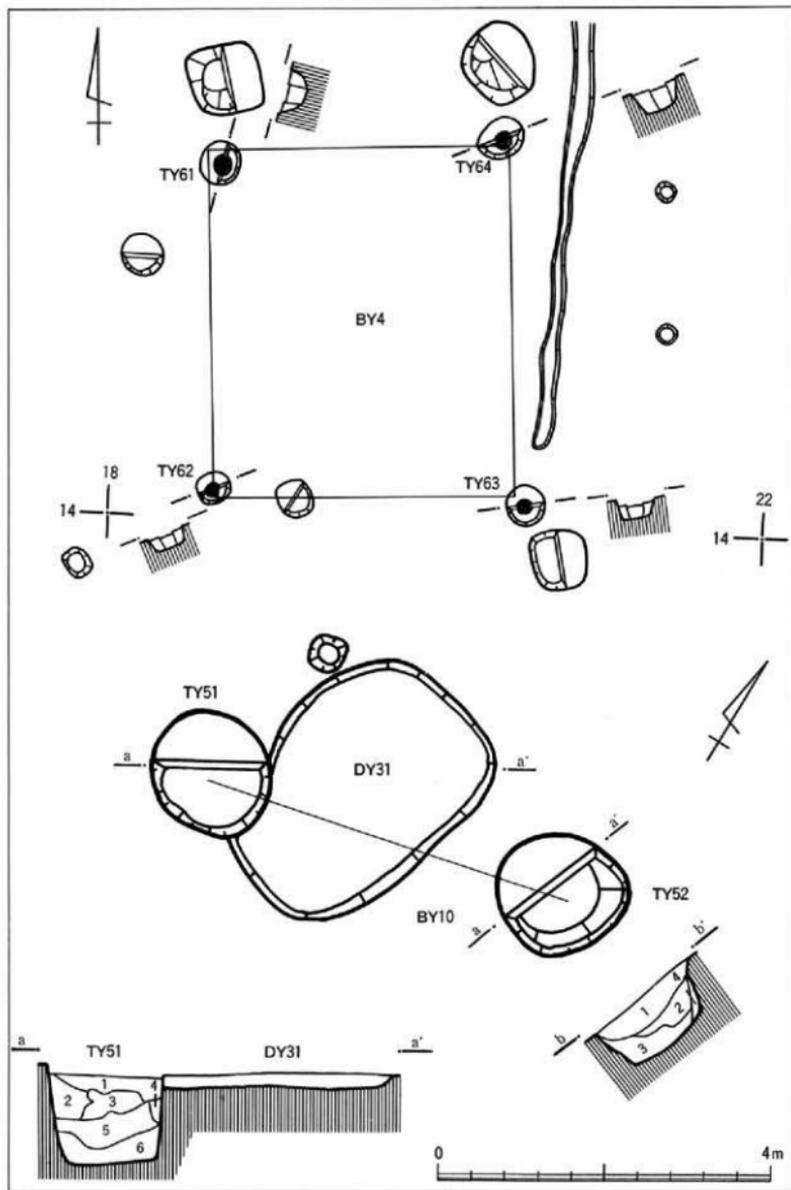
Ⅱ期の建物跡は、Ⅰ期の建物跡より小規模になるが建物跡の配置構成は、Ⅰ期の建物跡と同様の形態を示している。

・BY4 (掘立建物跡)「第8図」

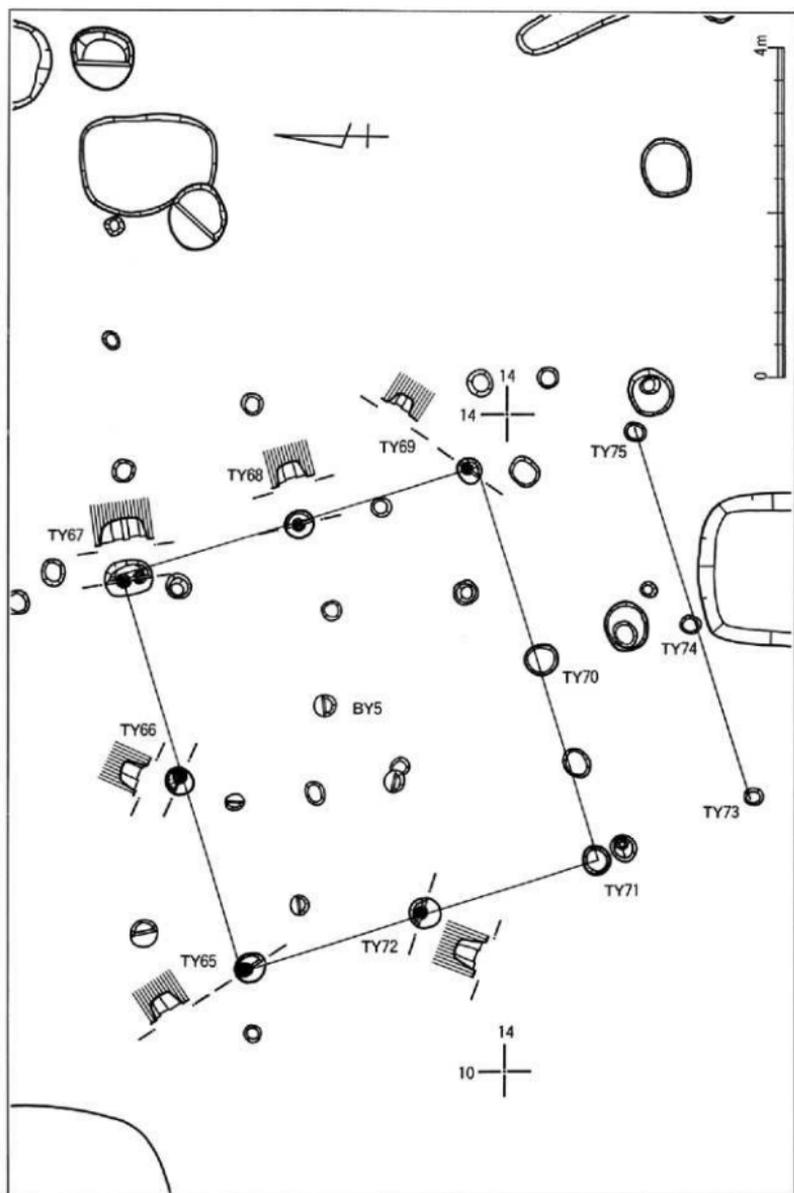
調査区のはほぼ中央部に確認された。桁行、南北1間(13尺)×梁行、東西1間(9尺)の規模を有する。掘り方の平面形は長方形を呈し、長短径55~60cmを測る。柱痕跡はTY61~64の全てから検出され径約10cm、深さ35~40cmを測る。主軸方向(N-10°-W)を示す。断面形状はほぼ垂直であり、覆土は2層に区分される。柱穴内部からの遺物の出土は認められない。BY3、KY37と重複する。Ⅱ期の母屋的な建物跡と推測される。時期はBY1建物跡のグループの後、9世紀初頭から9世紀中葉、平安時代の建物跡と想定される。



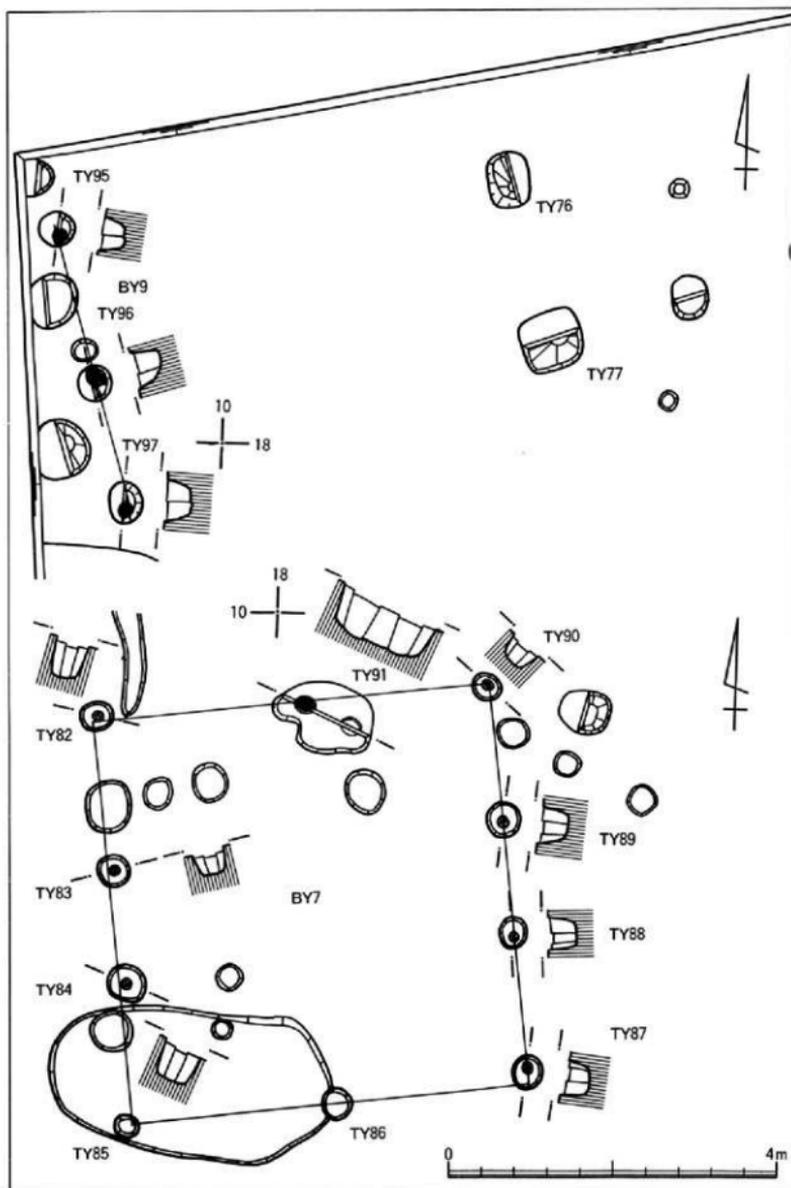
第7図 BY6・8掘立建物跡



第8圖 BY4・10獨立建物跡



第9圖 BY5獨立建物跡



第10図 BY7・9掘立建物跡

3 土壇 (I期)

・DY 35 (土壇)「第11図」

調査区の北東側に確認された。平面形は楕円形を呈し、長短径94～105cm、深さ15～20cmを測る。断面形状は西側が垂直、東側が緩やかで、底面は西側が若干深く、覆土は3層に区分される。遺物の出土及び重複関係は認められない。

・DY 39 (土壇)「第11図」

調査区の北東側に確認された。平面形は楕円形を呈し、長短径73～92cm、深さ35～20cmを測る。断面形状は北西側が緩やか、南東側がほぼ垂直、底面は平坦で、覆土は4層に区分される。遺物の出土及び重複関係は認められない。

・DY 40 (土壇)「第11図」

調査区の北東側に確認された。平面形は不整楕円形を呈し、長短径(60)～110cm、深さ18～25cmを測る。断面形状は北西側が緩やか、南東側が垂直、底面は東側が若干深く、覆土は3層に区分される。遺物の出土は認められない。南側でDY 41と一部重複する。

・DY 41 (土壇)「第11図」

調査区の東側中央部に確認された。平面形は楕円形を呈し、長短径(70)～90cm、深さ20cm前後を測る。断面形状は北西側が緩やか、南東側が垂直、底面は東側が若干深く、覆土は3層に区分される。遺物の出土は認められない。北側でDY 40と一部重複する。

・DY 42 (土壇)「第11図」

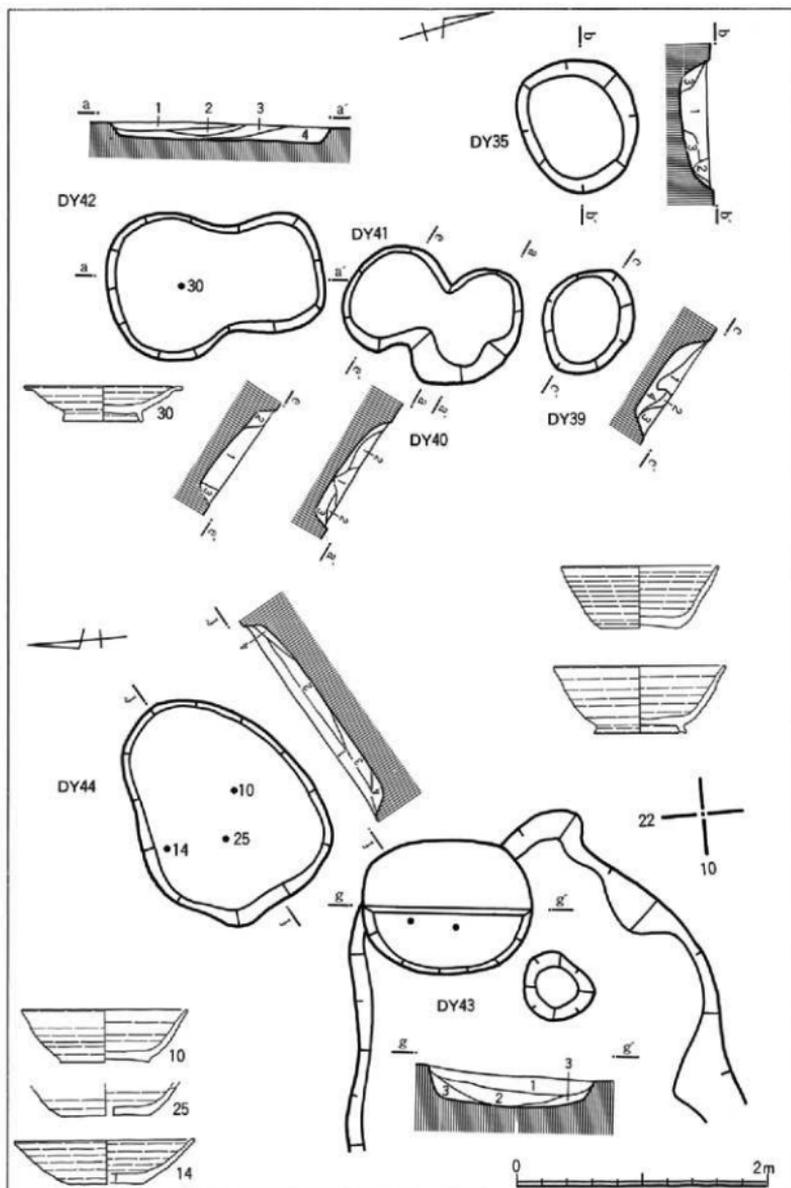
調査区の東側中央部に確認された。平面形は楕円形を呈し、長短径87～106cm、深さ20cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦で、覆土は3層に区分される。遺物の出土及び重複関係は認められない。

・DY 43 (土壇)「第11図」

調査区の東側中央部に確認された。平面形は不整楕円形を呈し、長短径150～189cm、深さ26cmを測る。断面形状はほぼ垂直で、底面は平坦で、覆土は3層に区分される。出土遺物には須恵器坏が3点ある。西側でDY 45(風倒木跡)と半分重複し切られるが、DY 43のほうが深いため残存する。

・DY 44 (土壇)「第11図」

調査区の東側中央部に確認された。平面形は楕円形を呈し、長短径118～138cm、深さ約25cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦で、覆土は3層に区分される。出土遺物には須恵器坏1点と同高台坏1点の2点がある。重複関係は認められない。



第11圖 DY35・39~44 土坑

4 溝跡 (I期)

・KY 37 (溝跡)「第14図 図版六」

調査区の北部に南北方向に確認された。溝跡はほぼ一直線で長さ11m、幅30cm前後、深さ20cmを測り南側に従って深い。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦で、覆土は2層に区分される。遺物の出土は認められない。KY 33・34 溝跡に重複し切られる。

・KY 38 (溝跡)「第4図」

調査区の中央部に南北方向に確認された。溝跡は若干蛇行しており長さ9.5m、幅60cm前後、深さ20~40cmを測り南側に従って深い。断面形状はほぼ垂直、底面は凹凸があり、覆土は5層に区分される。出土遺物は土師器、須恵器等の破片が多数認められた。今回の調査区の遺構でもっとも古い溝跡である。BY 1 東側柱穴と重複し切られる。

5 土壇・井戸跡 (II期)

・DY 53 (土壇)「第12図 図版四」

調査区の北側中央部に確認された。平面形はほぼ円形を呈し、長短径115cm、深さ25~30cmを測る。断面形状は南側が緩やか、南側以外はほぼ垂直であり、覆土は3層に区分される。出土遺物は須恵器破片が数点認められた。DY 32 と重複し切る。

・DY 55 (土壇)「第13図 図版四」

調査区の北中央部に確認された。平面形は円形を呈し、長短径96~105cm、深さ63~70cmを測る。断面形状は袋状を呈し、開口部から急角度で掘込み、底部部で袋状になり底部にかけて緩やかになる。底部は鍋底状を呈す。遺物の出土及び重複関係は認められない。

・OY 97 (墓塚)「第12図 図版七」

調査区の西側中央部に確認された。平面形はほぼ方形を呈し、長短径1.95~3.04m、深さ約25cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦であり、覆土は3層に区分される。須恵器、須恵質土器等の破片が多数認められた。また、14世紀代の越前の壺片(蔵骨器)が出土している。BY 1 を切る。

・DY 48 (土壇)「第13図 図版三」

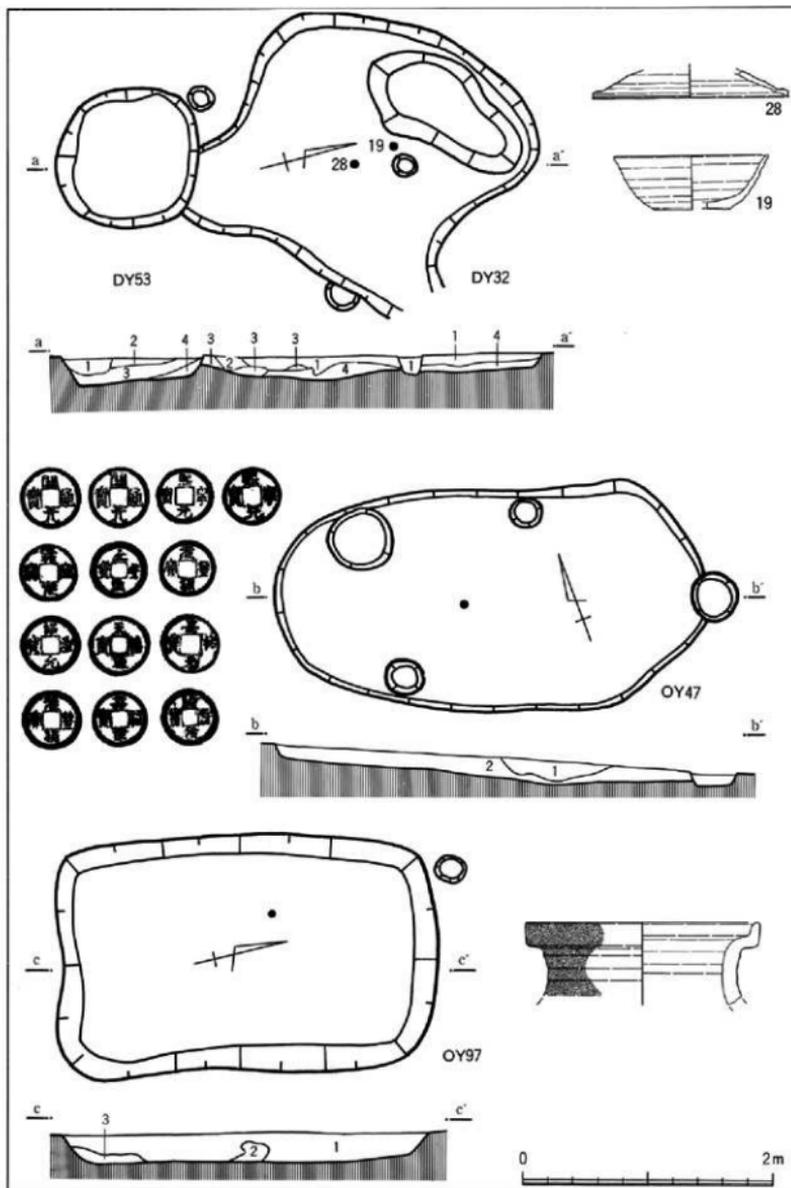
調査区の中央部に確認された。平面形は不正方形を呈し、長短径1.10~2.43m、深さ約20cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦であり、覆土は2層に区分される。出土遺物には、ほぼ完形の須恵器破片1点があり他に須恵器、須恵質土器等の破片が多数認められた。

・DN 54 (井戸跡)「第13図 図版五」

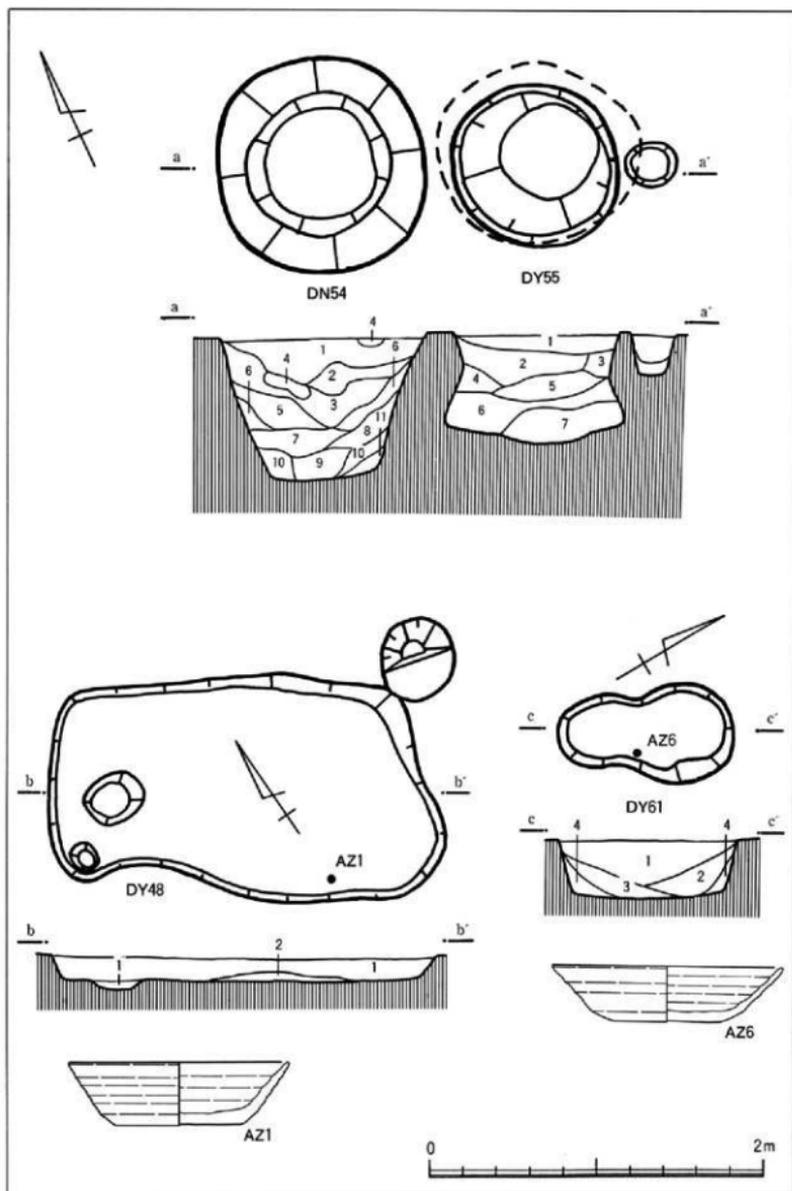
調査区の北側中央部に確認された。平面形は円形を呈し、長短径1.30m、深さ約90cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦である。覆土は11層に区分される。埋土から判断すると井戸跡と判断される。出土遺物は1点も認められない。

・DY 61 (土壇)「第13図 図版四」

調査区の東側中央部に確認された。平面形は不正楕円形を呈し、長短径45~105cm、深さ約35cmを測る。断面形状は垂直、底面は平坦であり、覆土は4層に区分される。出土遺物には、ほぼ完形の須恵器破片1点があり、他に須恵器、須恵質土器等の破片が数点多数認められた。



第12図 DY32・53土壺，OY47・97蓋壺



第13圖 DY48・54・55・61 土坑，DN54井戸跡

6 溝跡 (Ⅱ期)

・KY 33 (溝跡)「第14図 図版六」

調査区の北側中央部、東西方向に確認された。長さ約10m、幅40~120cm、深さ約30cmを測る。断面形状は垂直で、底面は平坦である。出土遺物には土師器、須恵器、須恵質土器片等が多数認められた。東側でKY 37を切る。

・KY 34 (溝跡)「第14図 図版六」

調査区の北側中央部、KY 33の南側並列して東西方向に確認された。長さ(13m)、幅40~120cm、深さ25cmを測る。断面形状は垂直で、底面は平坦である。出土遺物には、土師器、須恵器、須恵質土器片等が多数確認された。東側でKY 36に切られ、KY 37を切る。また、西側で南側に緩やかにカーブしDY 32に切られる。

・KY 36 (溝跡)「第14図 図版六」

調査区の北東部に南北方向に確認された。長さ3.55m、幅65cm前後、深さ約40cmを測る。断面形状はほぼ垂直、底面は平坦である。遺物の出土は認められない。KY 34を切る。

7 中世期 (Ⅲ期)

中世期には小規模な柱穴とピット、墓塚と土壇状の遺構や風倒木跡など約60基確認されている。柱穴やピット類の平面径・深さの規模は、いずれも20cm前後を測り、柱穴で建物を構成するには至らなかった。以下、中世期の主な遺構について述べる。

・OY 47 (墓塚)「第12図」

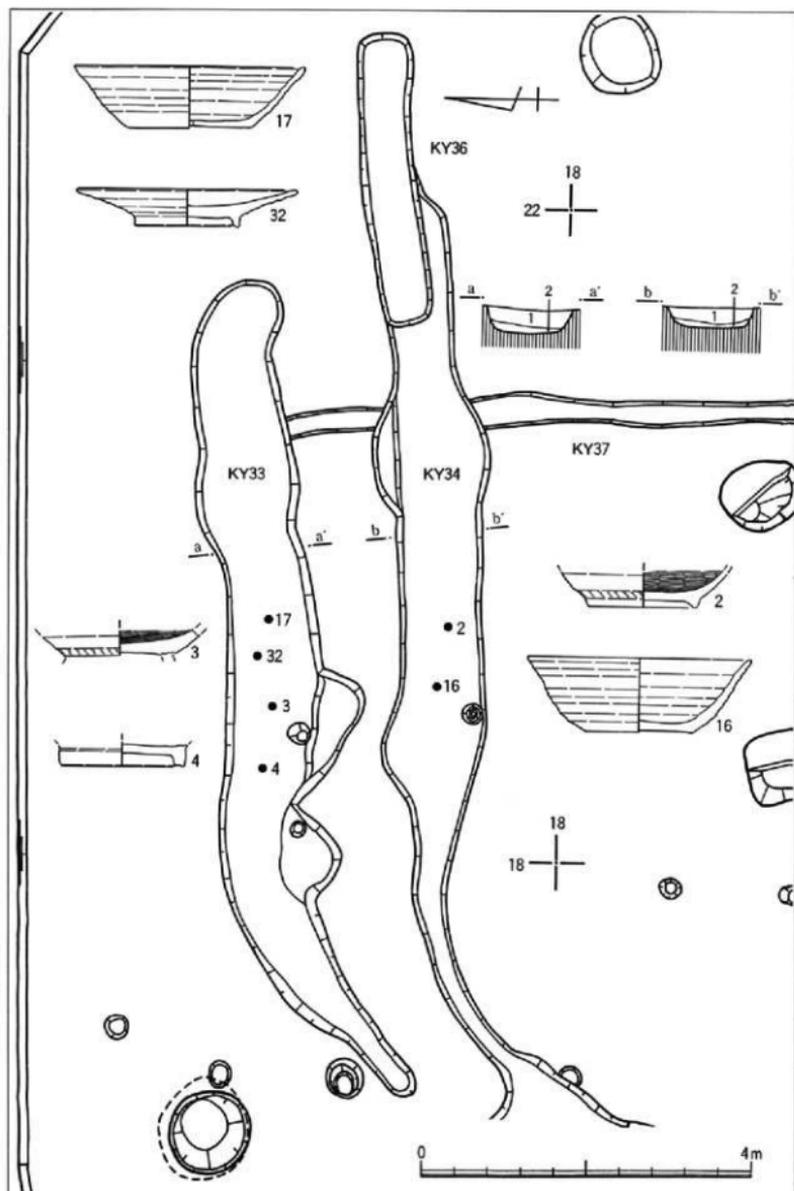
調査区の南側中央に確認された。この墓塚は、重機による表土剥離時に古銭が出土したことで確認されたものである。平面形は楕円形を呈し、長短径1.70~3.50m、深さは約20cmと浅く、上部の大部分は削平されているものと判断される。掘り方は垂直、底面は東側に緩やかに傾斜している。墓塚内の底部中央から古銭(開通元宝・天禧通宝等)13枚が重なり合った状態で出土している。BY 7の南東柱穴と重複し切っているが、柱穴の掘り方が深いため残存する。

・KY 49・56~60 (溝跡)「図版六」

調査区の東側に東西方向に確認された溝跡で、畝状になっている。長さ1.25~2.35m、幅30cm前後、深さ20cmを測る。掘り方は垂直、底面は平坦である。遺物の出土は認められない。

表-1 掘立柱建物跡計測値

遺構 No	桁 行	梁 行	時期
BY 1	南北3間 (8尺)	東西3間 (8尺)	I 期
BY 2	南北4間 (9尺)	東西2間 (7尺)	I 期
BY 3	南北1間 (9尺)	東西1間 (16尺)	I 期
BY 4	南北1間 (13尺)	東西1間 (9尺)	II 期
BY 5	南北2間 (8尺)	東西3間 (8尺) 南面幅3間 (約8尺)	II 期
BY 6	(南北3間) (3尺)	東西1間 (6尺)	I 期
BY 7	(南北3間) (8尺)	不 明	II 期
BY 8	(南北2間) (約6尺)		I 期
BY 9	(南北3間) (8尺)		II 期
BY 10	東西3間 (6尺)		I 期



第14圖 KY33・34・36・37 溝跡

第Ⅲ節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、Ⅰ期及びⅡ期の範疇にある柱穴と土壇、溝跡や、表土剥離時に出土したものであり、土師器(坏・甕)、須恵器(坏・壺・甕・皿・盤・蓋)、須恵質土器(坏・甕)など整理箱で約10箱分に相当する。

墨書土器は10点出土している。中世期に属する遺物は古銭13枚のみの僅かである。以下、主な遺物について器形的に分類し、A群1類を土師器坏、A群2類を土師器甕、B群を須恵器とし、1類を坏、2類を高台坏の皿状を示す坏類、3類を蓋、4類を甕、5類を壺、C群を酸化焼成を有する須恵質の土器、以下須恵質土器とし、1類を坏、2類を甕とし細分した。以下、実測図化したものについて概説する。

A群1類

〔第15図1～4 図版八〕

1は内黒土師器高台坏、口縁部がやや外反する高台坏で、口径底部が広い。内面調整は横ミガキ、高台接続部にはケズリを施している。器形の特徴から大浦遺跡編年のⅡ期前半、8世紀中葉に位置する。

2・3も内黒土師器高台坏で、回転ヘラ切り無調整のグループである。内面は横ミガキ、高台接続部にはケズリを施す。底部切離し技法は、回転ヘラ切り無調整である。3の底部には「田」?の掘り込みが施している。

4も内黒土師器高台坏、底部は回転糸切りで、「而」の墨書がある。大浦遺跡編年のⅢ期後半、8世紀末から9世紀初頭の範疇と考えられる。

A群2類

〔第19図37 図版十〕

口縁部破片資料である。ロクロ成形であり、口縁部付近で外反する。磨減が著しいが、内面と外面の口縁部は横位のハケメ、内面の胴部は斜位のハケメが一部認められる。大浦編年のⅢ期後半、8世紀末から9世紀初頭の範疇と考えられる。

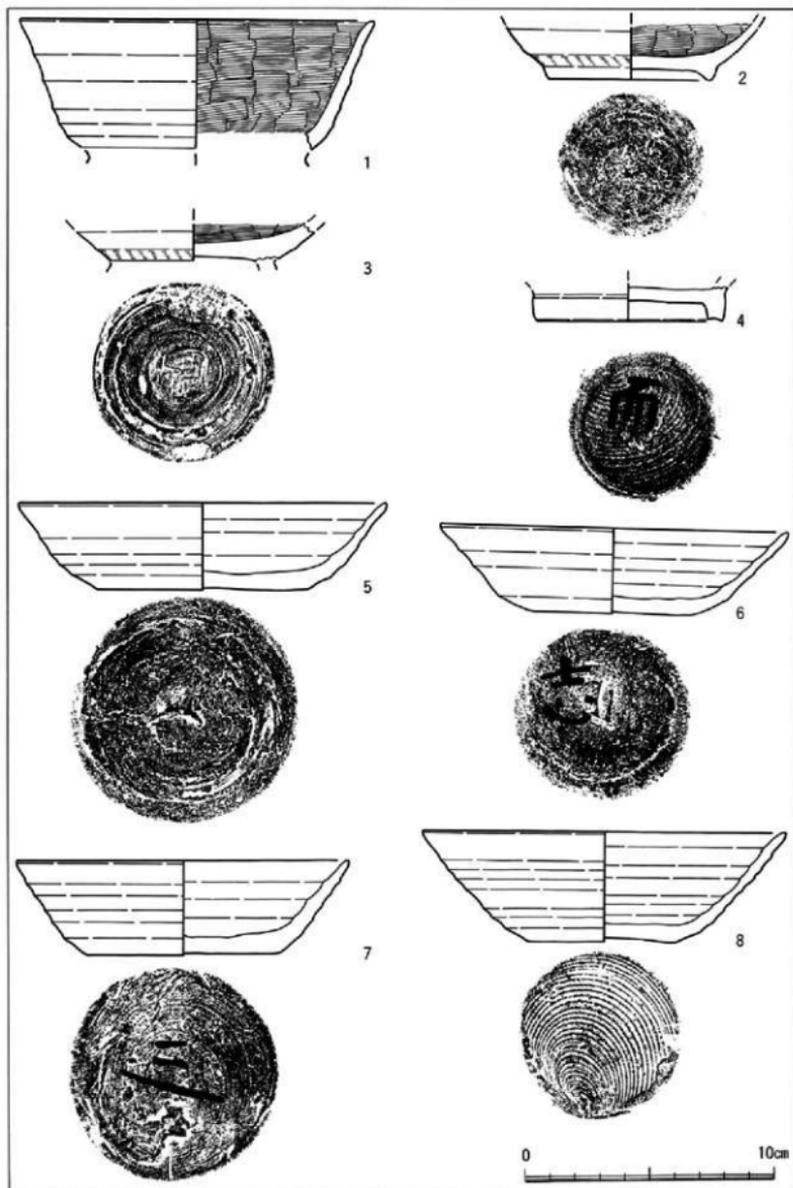
〔第15図5・6 図版八〕

口径及び底部が広く器高が低い。底部付近は丸みを帯びている。底部切離し技法は、回転ヘラ切り無調整のグループであり、底部から斜めに緩やかに立ち上がるのを特徴とする。6の底部には、「志」の墨書がある。大浦編年のⅡ期、8世紀中葉の範疇と考えられる。

B群1類

〔第15図7・8、第16図10・12・13・17 図版八・九〕

口径及び底部が広く器高が低い。口縁部が緩やかに外反し、下胴部にふくらみをもつ。底部切離し技法は、回転糸切り無調整のグループである。7の底部には、「三」の墨書がある。大浦編年のⅢ期後半、8世紀末から9世紀初頭の範疇と考えられる。



第16图 出土遺物実測図 (1)

〔第16図16、第17図18 図版九〕

口径が小さく器が高い。口縁部が緩やかに外反し、下胴部にふくらみをもつ。底部切離し技法は、回転糸切り無調整である。大浦編年のV期、9世紀中葉の範疇と考えられる。

〔第17図19～25 図版九〕

底部が広く器が高い。口縁部は外反しない。底部切離し技法が、回転糸切りである。19～23は底部外面が僅かに窪む。20の底部には、「造」の墨書がある。24・25の底部にも墨書跡があるが、破片資料であるため判読不明。大浦編年のIV期、9世紀初頭の範疇と考えられる。

〔第16図11 図版八〕

器形的には大型の高台坏である。底部切離し技法が、回転糸切りのグループであり、下胴部には明瞭な稜線をもたず、底辺部付近にはケズリを施していない。大浦編年のIV期、9世紀初頭の範疇と考えられる。

B群2類

〔第18図30～32 図版九〕

破片資料であるが口縁部によって3形態に分けられ、30の口縁部は大きく外反し、31が僅かに外反する。32は外反せずに底部から極めて緩やかに立ち上がる。底部切離し技法はすべて回転糸切りである。大浦編年のIV期、9世紀初頭の範疇と考えられる。

B群3類

〔第18図26～29 図版九〕

須恵器壺を一括した。すべて破片資料である。26は口径が小さく、肩部から口縁部にかけて内曲味に屈折し、口縁部が僅かながら内側に入る。鈕み部は宝珠形を示さないものである。27は、26とほぼ同様であるが口縁部の屈折が緩やかであり、口縁部が外反する。28は肩部から口縁部にかけて水平に屈折し、口縁部が大きく外反する。29は肩部が極めて緩やかである。調整はすべてロクロ成形である。大浦編年のⅢ・IV期、8世紀末葉から9世紀初頭の範疇と考えられる。

B群4類

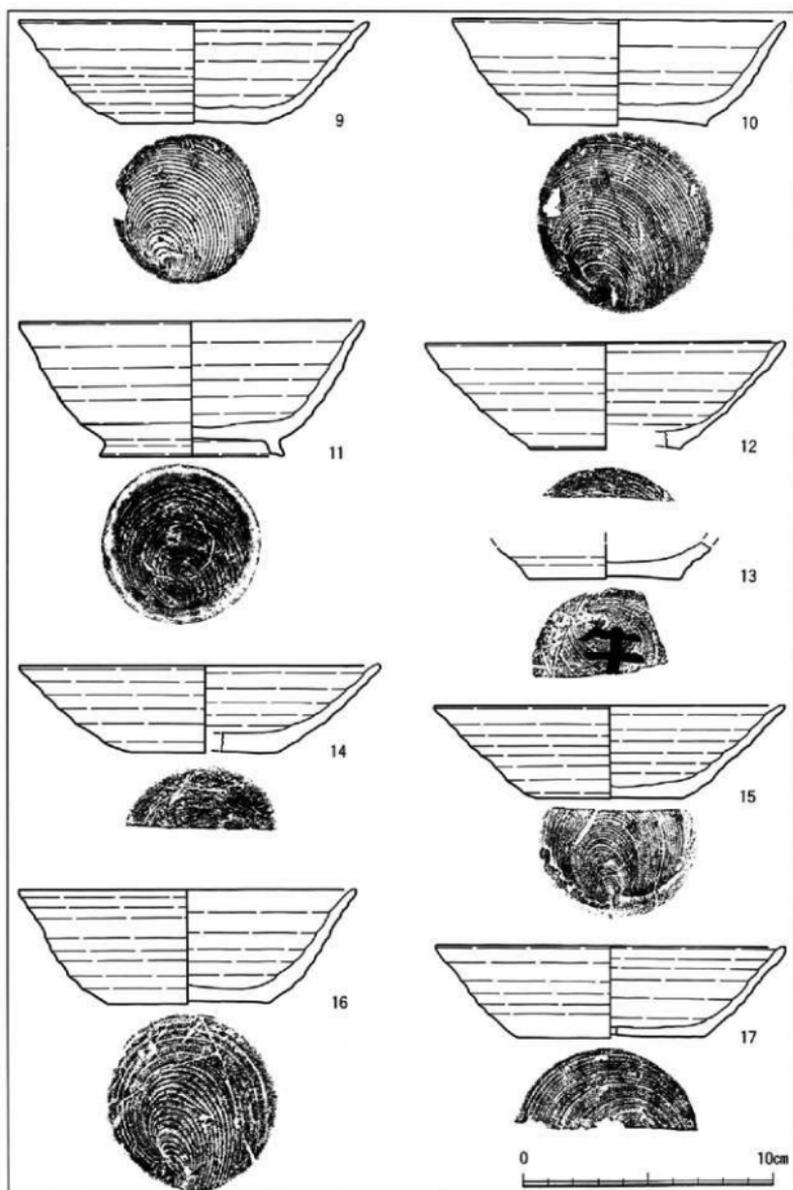
〔第19図33・34 図版十〕

口縁部破片資料であり復元可能なものはない。ロクロ成形である。33は、口縁部付近で外反し、口唇部が外に直立する。34の口縁部は大きく外反し、口唇部が内外に直立する。双方と共に、内面には横位のハケメとアテ跡、外面にはタタキが認められる。大浦遺跡編年のIV期、9世紀初頭から同中葉頃の範疇と考えられる。

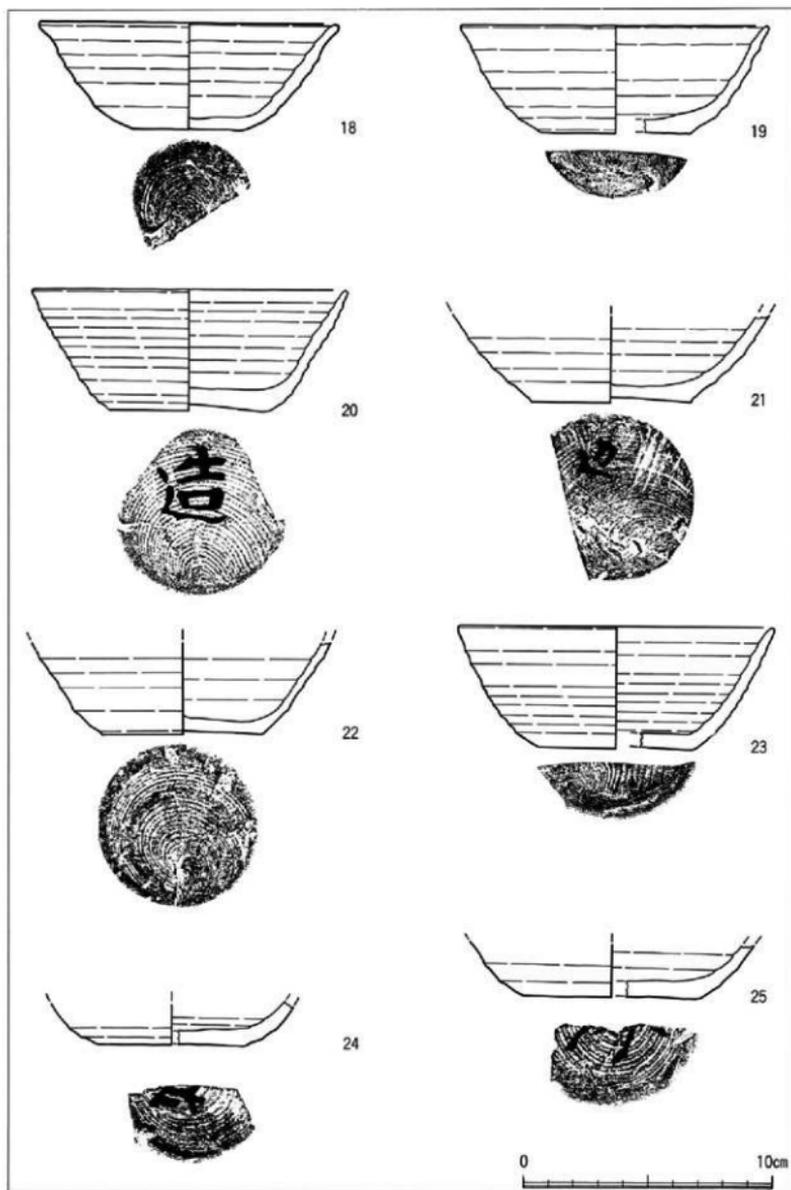
B群5類

〔第19図36 図版十〕

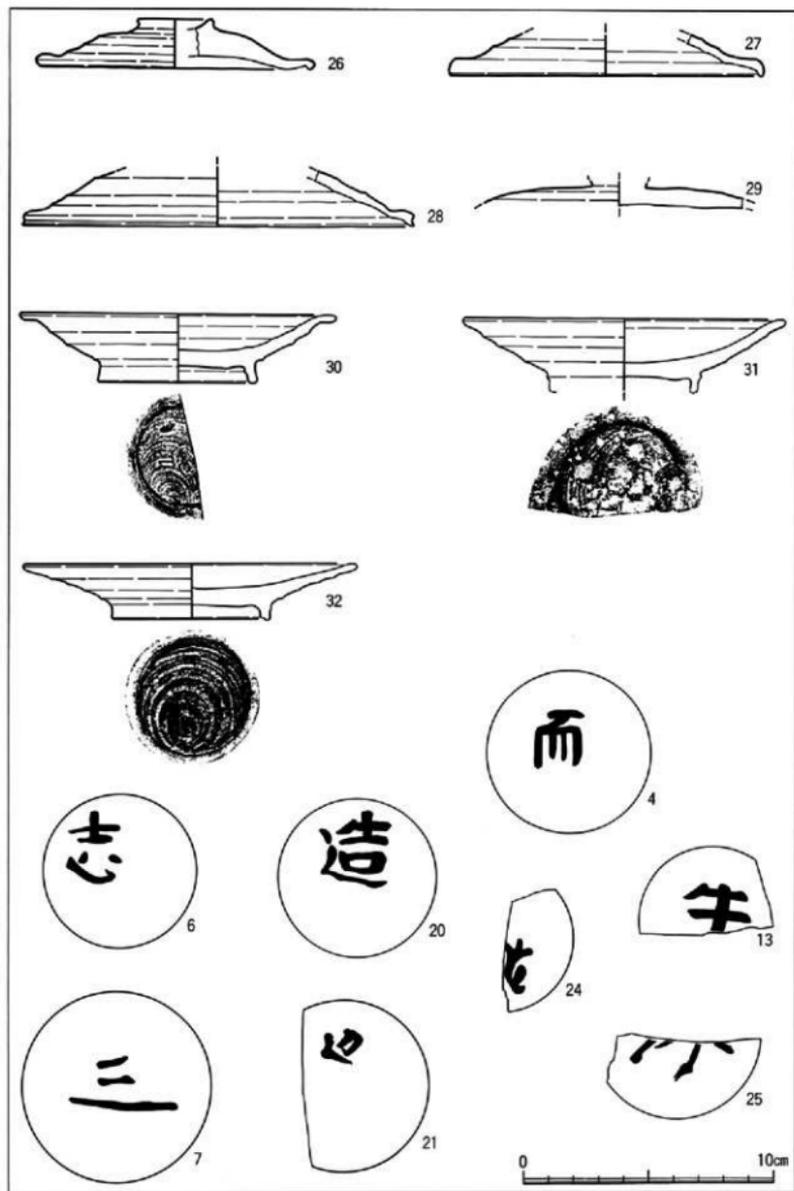
須恵器壺の体部破片資料であり復元可能なものはない。ロクロ成形でともに短頸である。頸部はほぼ垂直に立上り、口唇部が外反し直立するものと推定される。頸接続部には段を有する。大浦編年のIV期、9世紀初頭の範疇と考えられる。



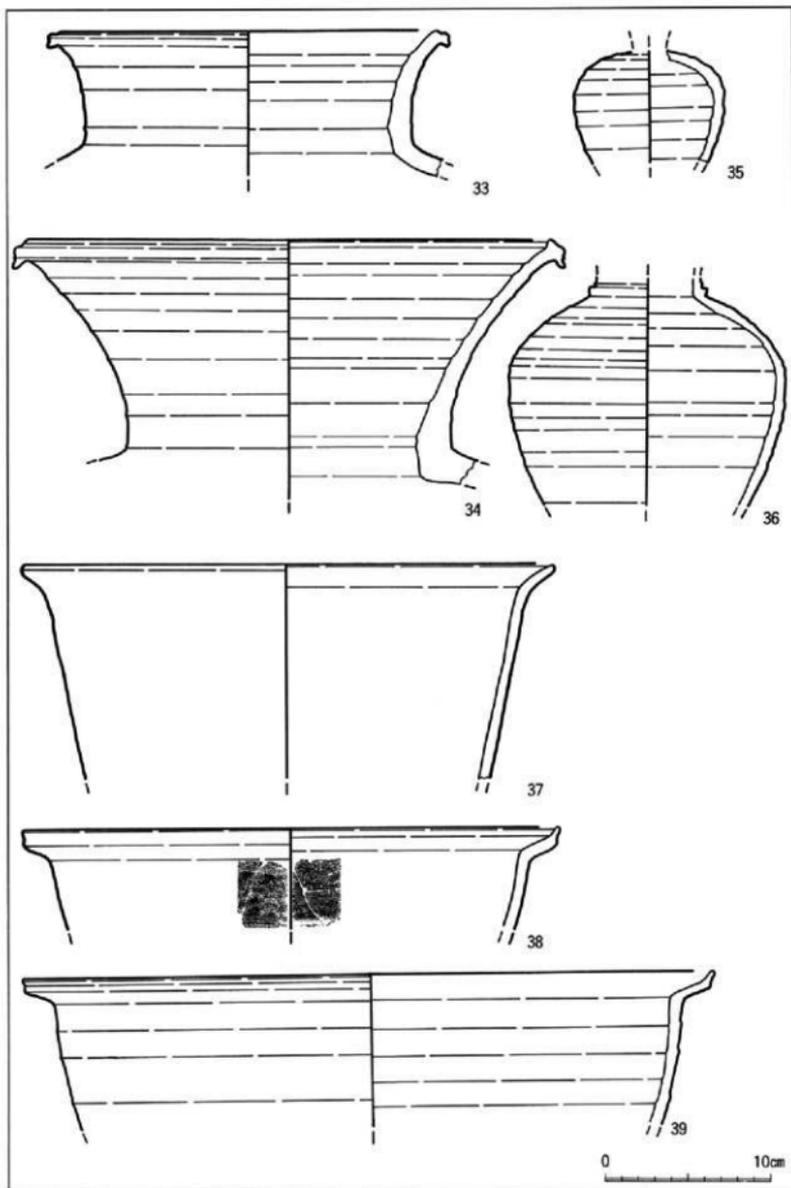
第16图 出土遺物実測図 (2)



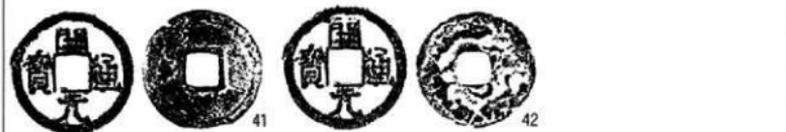
第17図 出土遺物実測図 (3)



第18图 出土遗物实测图(4)



第19図 出土遺物実測図 (5)



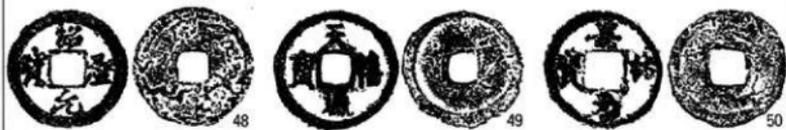
41, 42 開通元寶



43, 44, 45 熙寧元寶



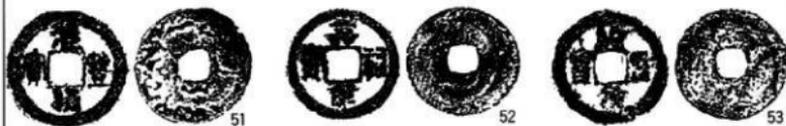
46, 47 元豐通寶



48 紹聖元寶

49 元祐通寶

50 景祐元寶



51 不明

52 不明

53 不明



第20圖 出土遺物古錢拓影圖

C群1類

須恵質土器の破片資料であり復元可能なものはない。ロクロ成形である。9世紀初頭の範疇と考えられる。

C群2類

〔第19図38・39 図版十〕

ロクロ成形であり復元可能なものはない。口縁部付近で外反する。内面と外面の口縁部は横位ハケメ、40の内外面胴部には斜位ハケメが認められる。ともに内面口縁部および外面胴部には煤が多量に付着している。大浦編年のⅣ期、9世紀初頭の範疇と考えられる。

中世期

〔第20図41～53〕

古銭はD Y 47(墓塚)の底部中央付近からの出土である。41・42は、開通元宝(唐時代 AD 845) 2枚、49は、天禧通宝(宗時代 AD 1071～1020) 1枚、50は、景祐元宝(AD 1094) 1枚、43～45は、熙寧元宝(AD 1063) 3枚、46・47は、元豊通宝(AD 1078) 2枚、48は、紹聖元宝(AD 1093) 1枚、他に不明古銭3枚が出土している。古銭は13枚が連続して重なり合う状態で出土している。

第Ⅳ節 総括

今回の調査によって検出された掘立建物跡10棟は、Ⅱ期の年代にかけて構成された建物跡群であることが判明した。

Ⅰ期の遺構は、溝や土壌などで区画された内部に母屋BY 2・3が設置されている。Ⅱ期になると建物跡は小規模になるが、建物跡の配置の構成がⅠ期と同じ形態でありBY 4・7が母屋的な存在で、桁行が南方向、梁行東西方向を示している。

出土遺物としては土師器(坏・甕)、須恵器(坏・壺・甕・皿・盤・蓋)、須恵質土器(坏・甕)、古銭などがあり、これらの遺物からⅢ期に分けることができる。Ⅰ期は奈良末から平安初期、Ⅱ期が平安、Ⅲ期が中世期である。

今回の調査で確認されたことは、本遺跡の範囲は舌状台地の東西50m、南北40mを有するものであると想定される。

遺跡の性格を考察すると、遺構の配置関係や総柱の倉庫跡の検出、墨書土器の出土、須恵器出土の割合が多いことなどを考慮すると、一般的な集落とは異なる公的な施設もしくは、地方官人の屋敷跡などと判断される。

参考文献

- 1981 笹原遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 1986 上浅川遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 1987 大浦A・C遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集
- 1991 大浦B遺跡発掘調査概報第I集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第29集
- 1992 大浦C遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集

報告書抄録

ふりがな	かねがさきAいせきはつくちようさほうこくしょ
書名	金ヶ崎A遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	月山隆弘
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992 山形県米沢市金池三丁目2番25号 TEL0238-22-5111
発行年月日	西暦1997年12月26日

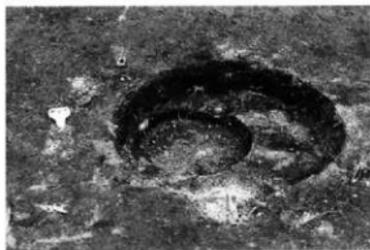
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かねがさきA 金ヶ崎A	やまがたけけんよねざわ 山形県米沢 しおほあざしほこい 市大字下新 だあざさんごうめん 田字三台免	6202	23	37度 57分 3秒	140度 8分 30秒	19950719～ 19950908	800	資材置場

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金ヶ崎A	集落跡	奈良・平安 中世時代	掘立柱建物跡 土壌 溝跡 柱穴など	10棟 14棟 11条	土師器・須恵器・ 須恵質土器・古銭

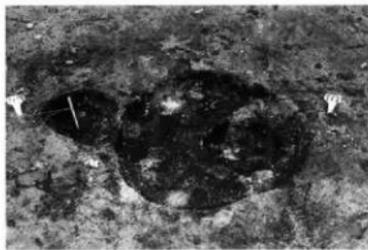
写 真 图 版



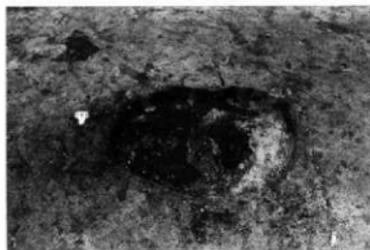
BY1 掘立建物跡 (南から)



TY1 柱穴



TY2 柱穴



TY3 柱穴



TY10 柱穴



BY5 掘立建物跡 (南から)



BY6 掘立建物跡 (南から)



DY48 土壙 AZ1 出土状況 (東から)



DY48 土壙 (東から)



DY61 土壌 AZ6 出土状況 (東から)



AZ2 出土状況



AZ5 出土状況



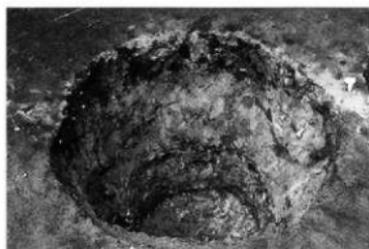
AZ6 出土状況



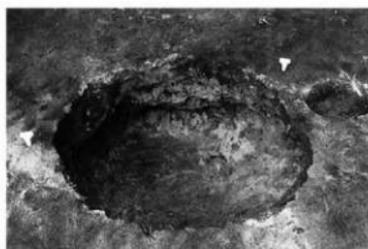
DY32 (右)・DY53 (左) 土壌 出土状況



DN54井戸跡 (左)・DY55土壇 (右) (南から)



DN54 井戸跡



DY55 土壇



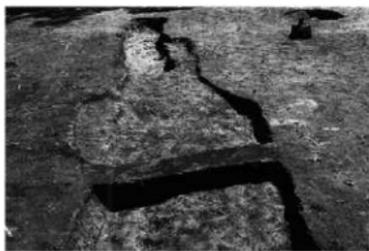
DY53 土壇



AZ3 出土状況



KY33 溝跡 (左)・KY34 溝跡 (右) (西から)



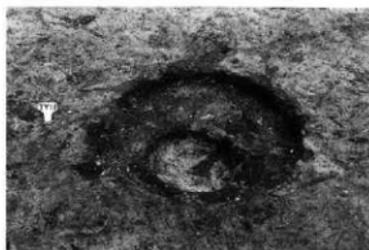
KY36 溝跡 (西から)



KY37 溝跡 (南から)



KY49・56~60 溝跡 (西から)



TY11 柱穴



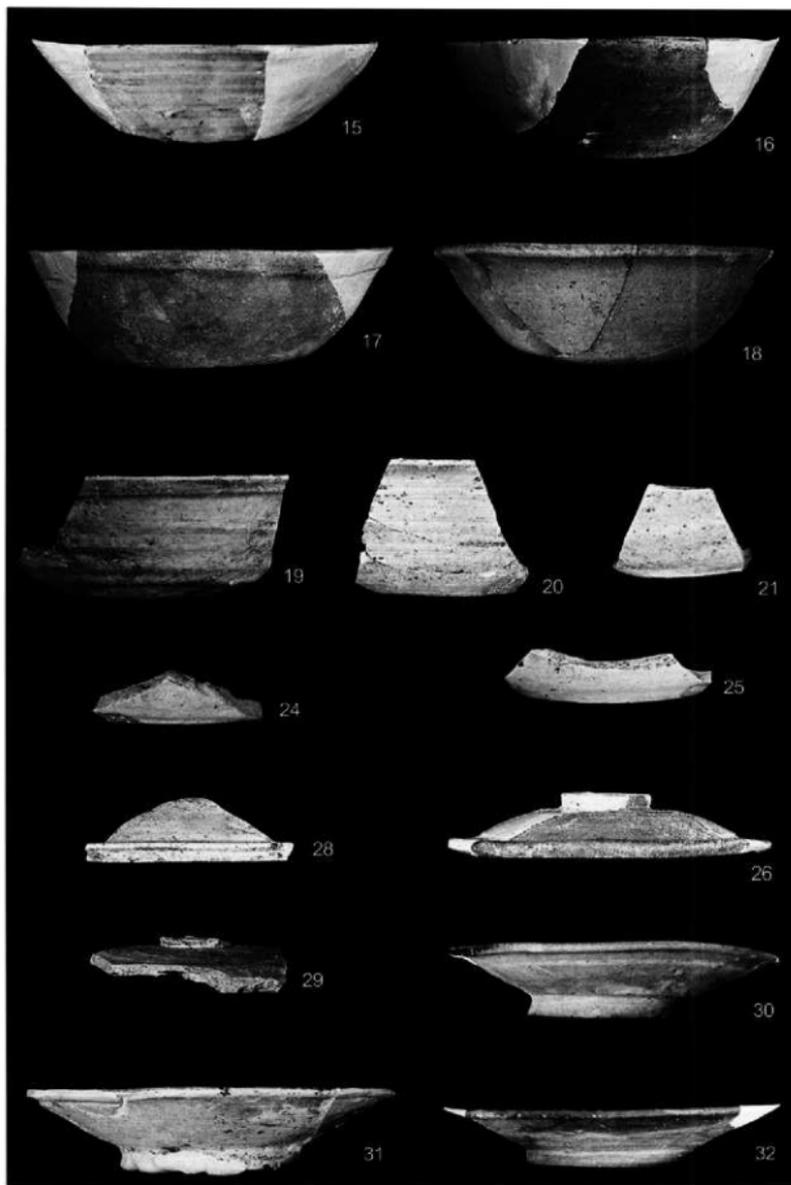
○Y 97 基痕 (南東から)

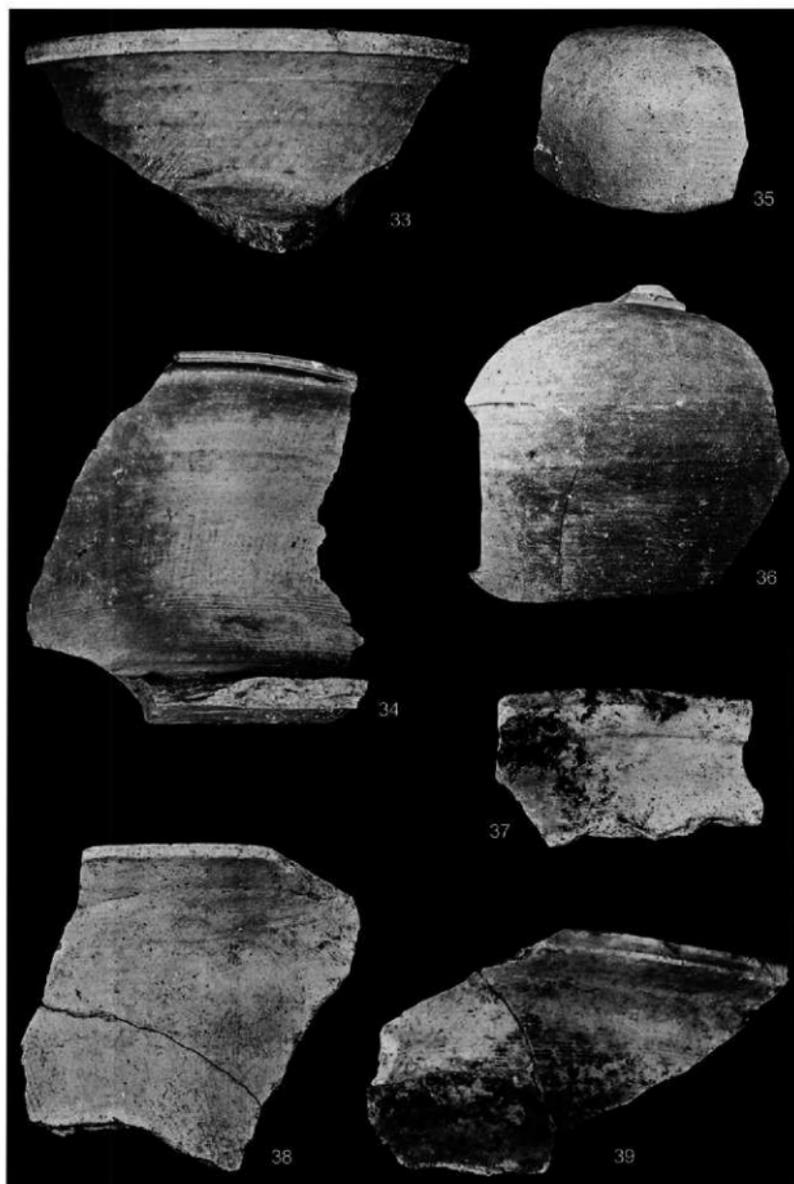


調査風景 (南から)



出土遺物(1)





出土遺物 (3)

米沢市埋蔵文化財報告書 第56号

金ヶ崎 A 遺跡
発掘調査報告書

平成9年12月25日 印刷

平成9年12月26日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池五丁目2-25
TEL (0238) 22-5111
内線7504

印刷 (株) 青葉堂印刷
米沢市下花沢三丁目8-50
TEL (0238) 21-2366
FAX (0238) 21-1776